



えどまえ うみ まな わ
江戸前の海 学びの環づくり
瓦版 第13号



東京海洋大学 江戸前ESD協議会 〒108-8477 東京都港区港南4-5-7 東京海洋大学海洋科学部

江戸前ESDしながわ塾

江戸前ESDしながわ塾をふりかえって

小堀 信幸 (船の科学館)

昨年4月から東京湾の埋め立て、水質、漁業という3つのテーマをもってスタートした「芝・品川の海を語ろう 江戸前ESDしながわ塾」(略称:しながわ塾)(東京海洋大学江戸前ESD協議会主催)では、全6回のプログラム(2頁参照)に沿って、参加した方々が自ら課題をもってリサーチし、その成果を発表し、そして「これからの芝・品川の海に望むこと」を提言としてまとめました。

しながわ塾は、実験や観察などの体験的学習やワークショップを中心に置き、課題を設定して、その解決までを考えるとというもので、博物館などが取り組んでいる体験学習の具体的事例として、とても参考になりました。というのは、博物館では、現在、「科学的・論理的な思考能力を育成し、話し合いやグループワークさらには説明発表を通して表現力を養うことを求め、興味・関心を引き出しながら『体験』、『気付き・振り返る』、『共有化する』、『新たな課題の設定』を目的とする」というラーニング・サイクルを基本とする体験学習に取り組んでいるからです。これはまさに、しながわ塾のプロセスであったと考えます。

私自身もしながわ塾で刺激を受けることが多々あり、「知識・情報の共有」をして「振り返る」、よい機会でした。ただし、課題もあるかと思えます。まず、「評価」です。しながわ塾は、学習をして、みんなで共有して、という段階を踏みながら進みました。最終的にはここでの学習が地域や社会に広がっていくことが必要だろうと思えます。すると、どこかの時点で、学習の効果や社会への普及について評価をしなくてははいけないと思えます。

もうひとつの課題は、「継続的に学ぶことができるしくみ」です。しながわ塾に参加された方々は、芝・品川の海や東京湾に対する興味にあふれていました。終了後も、新しい情報を欲し、スキルアップを望まれるのではないかと思います。ところが、次はどこから情報を得ればよいのか、わからなくなります。そういう方々が学び続けることができる、定期的な社会人講座を、東京海洋大学で提供していただければと思います。会場としては、大学ばかりでなく、博物館や社会教育センターのようなところも活用できます。そういう「東京湾大学」のような場をつくって、そこから情報を発信する、受けるというしくみをつくっていただくことが、今後、必要だと思います。

学校教育において「直接的な体験が不足している子供たちに、社会の変化に対応して行く力、即ち、生きる力(主体的創造的な問題解決力、豊かな人間性、たくましく生きるためのバランスのとれた力など)を身に付けさせるためには、自然や社会での実体験が必要である」と、体験学習の重要性を中教審が答申しています。こうしたことから、東京海洋大学には、大学教育を通して水圏環境リテラシー教育の理念と技術を身に付けたファシリテーターを輩出し続けることを期待します。

同時に、東京海洋大学には、家庭や地域社会で活動している、あるいは、海洋に興味のある社会人に対して、今後も、しながわ塾のような学習の機会と場を継続的に提供することも望みます。そして、その結果として、近い将来に、多くの方々の海洋に対する考え方や取り組みに、これまでと違った変化が見られることを期待するものです。

小堀 信幸 (こぼり・のぶゆき)

神奈川県は横須賀の生まれ。海に接する機会は多く有りましたが、夏休みに叔父に連れられて行った浦賀港での“バチスカーフ”との遭遇が、海や船への針路を切る切欠になった様です。これまで和船と格闘していましたが、最近は船舶の保存に興味が移っています。



江戸前ESDしながわ塾



これからの地先の海を語るために

川辺 みどり (東京海洋大学・海洋政策文化学科・准教授)

芝・品川のを学びながら語り合おう

「地先(ちさき)」の海とは、文字どおり、私たちの暮らす土地の前に広がる、もっとも身近な海を指します。かつての芝・品川の地先には、アサリやハマグリが豊富に生息する干潟や海苔を養殖する浅場が広がり、さらにその先に広がる海と一体となってもたらすさまざまな恵みが、海辺の暮らしを豊かなものとしてくれていました。

現在の芝・品川のは、ずいぶんと趣が違います。干潟・浅場は跡かたもなく、コンクリートで固められた灰色の埋め立て地には建物が立ち並んでいます。かくいう私たちのいる東京海洋大学(以下、海洋大)もこの一角にあります。ここでは海はどんよりと濁った運河という形で見ることができません。このような場所で「東京湾を保全しよう」と呼びかけても、ここに暮らす方々には、なぜそれが必要なのか、自分たちの暮らしとどのようにかわりがあるのか、なかなか実感が湧かないのではないのでしょうか。

「芝・品川のを語ろう 江戸前ESDしながわ塾」(以下、しながわ塾)は、過去から今にいたる芝・品川の海の変遷と今の様子を学びながら、地域の方々に、芝・品川の海これからどのようにあってほしいのかを語り合っていたら、という趣旨で、2010年4月から9月にかけての半年間、毎月第三土曜日の午後、おもに海洋大・品川キャンパスにおいて開催されました。

扱った題材は、「埋立て」、「富栄養化」、「漁業」という東京湾の大きな3つの課題です。全体のプログラムづくりでは、1. それぞれの題材について、現場で関わる方にお話しいただき、2. 参加者の方々に体験していただき、3. そこで得た感想などを話し合うことで、江戸前ESDが基本としている3つの共有(知識の共有、体験の共有、理解の共有)を進めるよう、留意しました。さらに、参加された方々には、ご自分なりの問題意識を持って「リサーチ」をしていただきたい、という願いも持っていました。

しながわ塾には、一般公募で申し込まれた35名が登録され、毎回20名～29名の方々が参加されました。

以下、各回について簡単に紹介いたします。(毎回の詳細については、東京海洋大学 江戸前ESD協議会のホームページにある「江戸前ESDしながわ塾ミニ瓦版」第1号～第6号をご覧ください。)

第1回 はじめに～江戸前の海の埋立てを知る

初回では、塾長・河野博教授(海洋環境学科)が、「ただお話を聞くのではなく、みなさん一人ひとりに課題を持って『リサーチ』をしていただきたい」と呼びかけました。その後、4～5人のグループに分かれて、しながわ塾で知りたいこと、明らかにしたいことをポストイット紙に書き出しながら話し合い、模造紙1枚にまとめました。この内容を会場にいる全員で共有するために、作成した模造紙を壁面に貼り、全員が会場を巡って、他のグループでどの

表1 2010年度 芝・品川のを語ろう 江戸前ESDしながわ塾 プログラム





日程(会場)	内容と講師およびコーディネーター(敬称略)	
第1回 4月17日(土) (東京海洋大学)	はじめに～江戸前の海の埋立てを知る 講師：大野 伊三男(東京みなと館)、コーディネーター：小堀 信幸(船の科学館)	
第2回 5月15日(土) (天王洲ヤマツピア； 東京海洋大学)	芝・品川を海から観る - 東京みなとクルーズ 講師：今井 健三(財日本水路協会)、 コーディネーター：師田 彰子(全国内水面漁業協同組合連合会)	
第3回 6月19日(土) (東京海洋大学)	芝・品川の海の水質とプランクトンを視る 講師：石丸 隆(海洋環境学科・教授/江戸前ESD協議会代表)	
第4回 7月17日(土) (金杉橋、iju25)	江戸前の漁業を聴く 講師：鈴木 晴美(6代目江戸前漁師)、 コーディネーター：馬場 治(海洋政策文化学科・教授)	
第5回 8月21日(土) (東京海洋大学)	ワークショップ「芝・品川のを振り返る」 コーディネーター：今井 健三、石丸 隆、小堀 信幸、藤塚 悦司(大田区立郷土博物館)	
第6回 9月18日(土) (東京海洋大学)	ワークショップ「芝・品川のを語ろう」 講師：ご参加の皆様	

表2 これからの芝・品川の海へ向けた提案

提 案	得票数
海辺にもっとアクセスできるように、干潟を増やしたり、SOLAS条約〔海上における人命の安全のための国際条約〕にかからない地区を一般人に開放したりしてもらえるように、働きかけよう。	14
たくさんの外国人を含む人たちに、マリンスジャーを含めて海を楽しんでいただくような「海洋観光立国」をめざそう。	9
「水辺の日」を作ろう。	9
東京湾についてもっと学ぼう。そして環境保全を政策的に実施しよう。	8
地形や植栽を人間の見地からでなく、環境としてとらえるべきです。埋め立て地の利用のしかたや植栽に、一層の研究・検証、そして配慮が望まれます。	6

ような話し合いが行われたのかについて発表を聞きました。

続く第2部では、小堀信幸さん(船の科学館)の司会で、大野伊三男さん(東京みなと館)が、江戸湊から現在の京浜港にいたるまでの東京港築港の経緯について、ビデオを上映しながら、解説しました。質疑応答では、「東京港には大型客船は入港できないのか」、「これ以上埋め立てる必要はあるのか」など、いろいろな質問が出されました。

第2回 芝・品川を海から観る - 東京みなとクルーズ

第2回は、今井健三さん(日本水路協会)のご案内で、天王洲ヤマツピア桟橋から(株)ジール「マルコポーロ号」に乗船、クルーズの予定と海図の読み方を解説いただいた後、東京湾港巡りへと出航しました。海洋大の係船場を左手に見ながら、第一ホテル東京シーフォート(第四台場跡)、品川発電所(品川埠頭)、青海埠頭に向かい、船の科学館、13号地信号所を経て、お台場にてしばし停泊、晴海埠頭で日本丸が展帆する様子や海洋大の練習船を見てからレインボーブリッジをくぐり、ループ橋を右手に再び京浜運河へ戻り、水上警察、港南大橋、目黒水門を通過してヤマツピア桟橋に戻りました。

下船後、海洋大に場所を移し、クルーズでの発見について話し合い、また、疑問や質問に、講師の今井さん、小堀さん、藤塚悦司さん(大田区立郷土博物館)との質疑応答を交えて「わかちあい」をおこないました。

第3回 芝・品川の海の水質とプランクトンを視る

始めに、東京湾の水質とプランクトンの関係について、石丸隆教授(海洋環境学科)から簡単な解説を受けた後、(株)共立理化学研究所の「パックテスト」を用いて水質を測定しました。前回のクルーズ航行中に採水した9測点の試料に加え、前もって採取してあった多摩川河口と相模湾中央の11測点の海水のアンモニウム態窒素、硝酸態窒素、亜硝酸態窒素、そしてリン酸態リンの4項目を4つのグループに分かれて担当しました。

水質測定終了後、全員で歩いて5分ほどの場所にある海洋大練習船の係船場に行き、プランクトンネットを用いてプランクトンを採集、実験室に持ち帰り、一人一台の実体顕微鏡を用いて観察しました。珪藻の他に、フジツボの幼生、クラゲの幼生、ゴカイの幼生、ヤコウチュウ、二枚貝の幼生、ミジンコ、カイアシ類など、さまざまな動物プランクトンを確認し、スケッチをしたり、写真を撮ったり、質問をしたりと、みな時を忘れました。

第4回 江戸前の漁業を聴く

梅雨明けの輝くような日差しの下、6代目江戸前漁師の鈴木晴美さんと馬場治教授(海洋政策文化学科)の案内で、芝・金杉橋から雑魚場(ざこば)跡や港湾の町として栄えていた頃の名残をとどめる芝浦運河や建物を訪れながら、約1時間の道程を歩きました。そして、終点である運河沿いのレストランiju25で、始めは一緒に歩いた

グループごとに、次に会場全体で、町を歩いた感想やその中での「今日の発見！」をわかちあいました。

そこへ晴美さんのお父さんと息子さん(船で登場、目の前の運河で刺し網漁を実演していただきました)のその後、終戦直後の芝周辺の航空写真や昭和30年代の海苔干し場や遊漁船を漕いでいた頃の写真、現在のアナゴ漁の映像を見ながら、東京湾漁業の今と昔の様子の違いについて晴美さんのお話を聴きました。

第5回 ワークショップ：芝・品川の海を振り返る

まとめにはいった第5回では、しながわ塾で今まで見てきたもの、体験したことについて、小堀さん、今井さん、石丸教授、藤塚さんが簡単な「ふりかえり」をしました。

その後、初回にお願いしたように、参加者の皆様が「リサーチ」成果を最終回で発表する準備のためのワークショップをおこないました。ここでは、それぞれが最も興味のあるリサーチの題目を決めて、4つの分野(「1. 港湾」、「2. 環境と生きもの」、「3. 江戸前の漁業と魚食」、「4. 東京湾の海辺を楽しむ」)ごとにテーブルに座り、スタッフともども話し合いながら、リサーチ計画をたてました。

第6回 ワークショップ：芝・品川の海を語ろう

最終回では、まず、前回の4つのテーブルに分かれて、リサーチ成果を発表しました。その上で、芝・品川の海で「これからもずっと続けてほしいこと」、「ちょっと問題なので改善してほしいこと」、「これからもっと望むこと」を話し合い、模造紙にまとめました。そして、各テーブルの代表の方から話し合った内容について報告いただき、各テーブルの「これからの芝・品川の海にもっと望むこと」から、江戸前ESDしながわ塾からの「提案」を投票(一人の持ち票は3票)で選び出しました。その結果を表2に示します。

最後に、最終回を含めて4回以上出席された24名の方々に「修了証」を河野塾長が手渡し、集合写真(8頁)を撮影して、しながわ塾は終了しました。

(かわべ・みどり)

江戸前ESDしながわ塾

芝・品川を海から観る - 東京みなとクルーズ 所感

今井 健三 (財)日本水路協会)

昨年1月下旬、川辺先生から、「地域の皆さんと芝・品川の海を多方面から調べ、話し合いながら、身近な海をこれからどのようにしたら良いかを考えていきたい」と、「江戸前ESDしながわ塾」のお話が持ち込まれました。

このとき依頼されたのは、参加された方々と船に乗り、芝・品川の海から、港や運河の自然や開発の様子を観察して、何か新しい発見をしてもらうための、水先案内でした。私は海図が専門なので、海から海図を見ながら港や運河の様子を観察して、海図に記録していけばよい、ぐらいの軽い気持ちでお引き受けしました。

ところが、しながわ塾で船をチャーターするクルーズ会社(株)ジールさんのご厚意で、3月に航路を見下した時、船長さんたちから次々と興味ある見どころについての確かな説明を受け、自分の知識の貧弱さを思い知らされました。この日は雨まじりの冷たい風が吹く海上模様で、ブライダル・クルーズの見学会に川辺先生と、フットワークが軽快で船にも強い師田さんと3人で便乗させて頂いたのです。

これではいけない、と5月の連休に入ったある日、丸一日かけて、天王洲アイル駅からしながわ塾の「東京みなとクルーズ」の航路に沿って陸路を歩いてみることにしました。

第四台場を埋立ててつくられた「シーフォート・スクエア」から調査を開始し、計画した航路に沿って運河の岸边を歩き始めました。大井ふ頭、品川ふ頭と歩くうちに面白いものが次々と目に留まり、写真を撮ったり、スケッチをしたり、近くの事務所、ビル、船宿に飛び込んで話を聞いたり、となかなか前に進まず、ようやく昼過ぎに芝浦ふ頭にたどりつきました。

午後からは気温も上がり、息も上がり気味でしたが、レインボーブリッジの歩道橋を歩いて、東京港の新しい施設を確かめながら第三台場に渡りました。ここでは築港測点などを発見したり、砲台跡の様子、台場泊地の航路ブイの形、塗色、数を観察したりしました。そのうちに夕方となり、調査を終え、ゆりかもめに乗って帰路につきました。お陰で、東京港の岸边を自分の目で歩いて確認することができ、本番に向け、一寸と安心しました。

5月15日の「東京みなとクルーズ」当日はお天気に



写真1 第2回「芝・品川を海から観る—東京みなとクルーズ」にて、船上で当日の航路について解説をする今井健三さん。



写真2 第5回「芝・品川の海をふりかえる」にて、東京みなとクルーズのふりかえりをする今井さん(右端)。

恵まれ、快適なクルージング日和となりました。参加された皆さんに、十分満足頂ける説明ができたかどうか、不安でした。しかし、下船後の「わかちあい」では、参加された皆さんのお一人お一人が独自の興味深い発見を発表されておられ、一安心しました。

今回、しながわ塾のお手伝いをさせて頂き、私自身が貴重な経験をさせていただいたことと、事前の準備にお骨折りされた師田さんをはじめ学生スタッフの皆様から心から感謝申し上げます。

(いまい・けんぞう)

江戸前ESDしながわ塾

つなぐ・つたえる、という役割 - しながわ塾運営スタッフとして

師田 彰子 (全国内水面漁業協同組合連合会)

私は、「しながわ塾」のひとつ前の連続講座、「江戸前マイスター講座」(2009年9月から2010年2月まで大森海苔のふるさと館にて東京海洋大学江戸前ESD協議会が主催;瓦版12号参照)から江戸前ESD活動のお手伝いをさせていただきました。この間、心がけていたのは、運営スタッフの一員として、主催者と受講生の皆様との間にあるもの、人の交流や情報を、より良くつなぐことです。

しながわ塾は、見る・聴くなどの体験(体感)を通して、「発見」や「疑問」を話し合い共有しながら、受講生のそれぞれが課題を持ちリサーチを行う、という形で進められました。毎回、試行錯誤の連続でした。

東京みなとクルーズや真夏の町歩きでは、下見や実地踏査を行い、参加された方々の安全について特に配慮しました。しかし、本番に臨んで、野外での音声情報の伝達方法などもまた課題であることが初めてわかりました。

また、気持ちが温まれば、場も温まり、人や情報の交流も深まると考え、コーヒー・ブレイクも含めて、会場では気配り・目配りなど、多くの「配りもの」をしたつもりです。ようやく慣れた頃に最終回を迎えてしまいましたが、参加された皆様の元にはどれだけ届いたでしょうか？

しながわ塾のような活動(江戸前マイスター講座も)は、継続することが重要であり、修了生からも進学希望(?)の声も多かったようです。回を重ねる毎に、理解を深め交流を深め、意欲的になられていく受講生の皆様の様子を拝見していて、私も大変うれしく思っております。また、機会があればお手伝いさせていただきますと考えています。

2010年ノーベル化学賞としてクロスカップリングという化学反応が話題になりました。この反応の解説図を見ていて、あるイメージと重なりました。結合するのは、しながわ塾に関わる方々や情報であり、運営スタッフの役割はその間を取り持つ「触媒」である、という構図です。しながわ塾を初回から最終回まで、学生スタッフの強力なサポートに支えられながらもともに過ごし、主催者(東京海洋大学江戸前ESD協議会)の趣旨や受講生の真摯な気持ちをいただきながら、「しながわ塾での学びの、よき触媒となることができたか」と自問するとき、思い浮かぶのは、終わりに受講生はじめ関係者の皆様が見せて下さったいくつもの笑顔です。

貴重な体験と共に多くのことを学ばせていただき、お世話になった皆様には心よりお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

(もろた・あきこ)



写真1 第2回「芝・品川を海から観る—東京みなとクルーズ」にて。中央が師田彰子さん、その奥で解説をしているのが今井健三さん。



写真2 第6回「芝・品川の海を語ろう」にて、テーブルで参加された方々のリサーチ成果を発表しあった。左が師田さん。

江戸前ESDしながわ塾

地域から江戸前 ESD の活動を思う

藤塚 悦司（大田区立郷土博物館・学芸員）

江戸前ESDの特色の一つに、地域と積極的に関わってこうとする姿勢があると思います。それは、江戸前ESDの活動が、研究教育機関と地域、および地域間の連携を育てるための関係性づくり、あるいはしくみづくりの試みでもあるからだ、私は理解しています。

そのツールとしての「知」を、その流れの方向で捉えて見ましょう。例えば「知」の流れを矢印で記せば、大学が出前講座を企画すると、研究教育機関が蓄えてきた「知」の流れは(大学→地域)となります。また、地域の人々に蓄えられた「知」を研究材料として活用していただく(地域→大学)となるのでしょうか。大雑把で単純すぎる図式なのですが、これが従来の代表的なスタイルです。地域と大学が「協働」と銘打って行われている活動も、「知」の流れがこのような矢印でイメージされてしまう姿から中々、脱皮できてこなかったように見受けられます。それからすると、江戸前ESDの取組みの手法は、とても新鮮に受け止められるのではないのでしょうか。

前回の江戸前マイスター講座でも、地域との関わりは大切な視点として組み立てられていました。科学者とともに講師陣に漁業や流通で活躍されている方々が配置され、地域で蓄えられた「知」が語られました。受講者とのコミュニケーションも配慮されていましたが、受講者各自が地域を深く意識して思考することは課題として残りました。

そして今回のしながわ塾では、参加者自身が受講して得た知識と、自身に蓄えられている「知」とをすり合わせ、そこで生まれた疑問や興味を蓄積していく方法が用意されました。それぞれのテーマの回を重ねるごとに、理解と新たな疑問が芽生える。そして、「ふりかえり」や「わかちあい」のコミュニケーションを通じて共有化される「知」が、各人のリサーチテーマ選択の視点へと成長していく流れは、とても興味深いものでした。「知」の流れを一方的にではなく、相互に揺り動かし、「ふりかえり、わかちあう」ことで、地域に内在する「知」が様々な思考を生み出す共有の宝庫となって表出するのだ、と気づかされました。このような手法を取りながら私たちは、人との多様な係わりを持続可能とする東京湾の姿を模索していきたいものです。

この活動の手法は、地域で活動する施設にとって可能性を秘めたものだと感じています。私は、勤務する大田区立郷土博物館が「大森 海苔のふるさと館」を所管していることが縁で、この活動に参加させていただきました。地域施設が個々に行う活動や、施設間の連携活動にとっても、江戸前ESDの活動の仕掛けはとても刺激になるものと思っております。

最後になりますが、貴重な活動に参加させていただきましたことに感謝いたしますと同時に、今後もこうした活動が継続し、進化していくことを期待しております。

(ふじつか・えつじ)



写真1 第4回「江戸前の漁業を聴く」の最後のふりかえりで、江戸前の海苔養殖の歴史について解説する藤塚悦司さん。



写真2 第5回で「江戸前の漁業と魚食」について話し合う参加者のみなさんと藤塚さん。このテーマには若い方が多く参加されました。

江戸前ESDしながわ塾

殿（しながり）で最初の一步 - しながわ塾と今後の活動

河野 博（東京海洋大学・海洋環境学科・教授）

しながわ塾が、まずは安全に、そして活発な実りのある活動であったことに、塾長として御礼申し上げます。参加者のみなさんのなみなならぬ熱意は、本瓦版で実行委員の方々から紹介していただきました。そこで私は、少し視点を変えて、私たちの活動におけるしながわ塾の位置づけと、今後の私たち東京海洋大学江戸前ESD協議会の活動の方向性について考えてみます。

私たちの活動の基本は、江戸前の知識・体験・理解を共有することの「三つ巴」あるいは「串刺し」という仕掛けによって、自然科学の「自然知」や社会科学の「社会知」だけではなく、地域の方々の「ローカル知」を駆使し、「協働の知」を生み出すことです。その過程で江戸前ESDリーダーが生まれ、リーダーとの協働によって江戸前の諸問題の解決に寄与しようということが目的です。2006年の活動開始以来、60回以上のプログラムを実施してきました。その中には、子供向けのプログラムや地域で活動している方々との共同プログラム、単発のサイエンスカフェなどが含まれています。東京湾の資料を集めた「東京湾アーカイブズ」も作製しました（本学のHPの図書館から入れます）。

しながわ塾の前、2009年9月～2010年2月には江戸前マスター講座を開催しました。江戸前マスター講座では、自然知と社会知を駆使して、参加者の方々に、とにかく江戸前（東京湾）というものを知っていただくこと、「知識の伝達」に重きを置いたプログラムを実施しました。一方しながわ塾では、内容的には江戸前マスター講座よりもかなり絞ったのです

が、参加者がローカル知を発揮するような機会を多くし、さらに協働知を通して、最終的には提言を策定しました。

したがってしながわ塾は、これまでの4年間の殿（しながり）を務めるプログラムであり、三つの知を結集して協働の知を試行する最初のプログラムであったと位置づけられます。

二つのプログラムを実施して、やはり物足りないのが、巻頭で小堀さんが指摘していらっしゃるように、「継続的に学ぶことができるしくみ」です。江戸前マスター講座の瓦版特集号(12号)でも、生涯学習制度の必要性を訴えました。今回もそれを痛感しています。

元々私たちは「東京湾(水圏)環境教育研究センター」や「海洋環境人材育成プラットフォーム」といった組織を立ち上げ、卒業生や地域の方々、あるいは水産・海洋高校の先生方や環境インタプリターの人たちのリカレント教育や生涯学習の場を提供しようという構想をもっていました。しかし諸般の事情により、一時的に断念していたのですが、いよいよ機は熟したのかなと考えています。今後は、これまでのようないろいろな活動、とくに協働知にまで達するようなプログラムを実施するとともに、組織づくりにも少し活動の幅を広げようと考えております。私たちの認識では、私たちの活動の分岐点に位置しているのが、しながわ塾です。

(こうの・ひろし)



写真1 第5回で参加者のみなさんにリサーチのテーマを決めていただくことと解説する河野塾長。絵は申中華さんと有馬優香さん（海洋大・院）の力作です。



写真2 第5回で「環境と生き物」についてリサーチをしようかと相談する参加者のみなさんと石丸隆教授（中央）。

御礼：江戸前 ESD しながわ塾

— 編集後記にかえて —

川辺 みどり

江戸前 ESD しながわ塾 事務局

2009年12月に河野博教授、石丸隆教授、馬場治教授と相談しながら江戸前ESDしながわ塾を起案して以来、多くの方々からご助言とご支援をいただきながら運営してきました。この紙面を借りて、しながわ塾にかかわられたすべての皆様に心から御礼申し上げます。

広報については、港区芝浦港南地区総合支所協働推進課の石井悦子さん、NPO法人「海塾」の榎本茂さん、東京都港湾局の斎藤雅代さんからたいへん親身にご助言をいただきました。ご紹介いただいた芝浦運河ルネッサンス協議会と天王洲運河ルネッサンス協議会の方々には、広報用ちらし(図1)の配布までお手伝いいただきました。2010年2月初旬から約1カ月間、港区および品川区の図書館などの施設にちらしの掲示をお願いし、また、海洋大ホームページに掲載したところ、定員(30名)の3倍近くのお申し込みとお問い合わせをいただきました。ご参加いただけなかった方々には、誠に申し訳ありませんでした。

内容については、2010年1月に小堀信幸さん(船の科学館)にご相談し、大野伊三男さん(東京みなと館)と今井健三さん(日本水路協会)をご紹介いただいたこと、そして藤塚悦司さん(大田区立郷土博物館)とともに「江戸前ESDしながわ塾実行委員会」に参画いただいたことで、海洋大教員だけでは扱いにくい、けれども、芝・品川の海を語るには欠かせない、港湾と歴史をもその題材に含めることができました。さらに、師田彰子さん(全国内水面漁業協同組合連合会)には始めから、梅川瑞穂さん(日刊水産経済新聞社)には途中から、委員として運営を支えていただきました。

学内外の委員会メンバーは、担当される回の準備はもちろん、参加された方々からの質問に丁寧に対応し、リサーチの相談に乗り、さらに、毎回のプログラムを決めるために平日の勤務後に集まって相談し、しながわ塾が質の高い学びの場となるように努めました。これを支えてくれたのが、学生スタッフの面々です。事前準備から、会場設営、話し合いの進行、写真撮影、模造紙のまとめ、「ふりかえりシート」の集計まで、安心して仕事を任せることができる心強いパートナーでした。



写真1 最後に参加者とスタッフ全員で写真を撮りました。

図1 江戸前ESDしながわ塾の広報用ちらし

私個人としては、しながわ塾を始めるにあたり、江戸前ESDの「知識の共有」→「体験の共有」→「理解の共有」を軸とする学びの形がどのように受けとめられるのかを確かめてみたい、そして、この講座を通して東京湾の恵みを将来にわたって享受するための利用のしつみを地域から立案していく道筋を考えたい、という二つの希望を持っておりました。

第一の「知識の共有」→「体験の共有」→「理解の共有」という学びの形は、参加された方々に受け入れていただけたように思います。

第二の「地域からの東京湾利用のしくみづくり」については、参加された方々と委員の皆様は江戸前の海についての知識や思い入れ、学ぶことへの熱意、さらに不測の事態に際しての寛容な態度に、感心し、圧倒され、感謝し、の連続で、しながわ塾は私にとって「人が学び合う」ことについてのおおいなる学びの場でした。これから記録を整理して、いつか稿をあらためてご報告したいと思います。

本講座は、平成21年度(財)日本生命財団学際的総合研究助成(2010年9月終了)、科研22310029をいただいて実施しました。また、今号の印刷発行にあたっては、神田穰太教授(海洋科学部・海洋環境学科)にお力添えいただきました。ここに記して深謝いたします。

(かわべ・みどり)

発行 江戸前ESD瓦版編集委員会
〒108-8477 東京都港区港南4-5-7
東京海洋大学 江戸前ESD協議会 事務局内
電話/FAX 03-5463-0574 (川辺研究室)
電子メール kawabe@kaiyodai.ac.jp
ホームページ <http://www2.kaiyodai.ac.jp/~hirokun/edomae/index-esd.htm>